

本多の校印

人口問題研究所

研究資料第十四號

昭和二十三年四月二十五日

昭和二十五年までの推計人口の分析

厚生省 人口問題研究所

昭和三五年引での推計人口の分析 目次

世しがき

一頁

一 總人口の變動

二 生産年令人口の増加

一六

三 年令五歳階級別觀察

一六

むすび

二九

はしがき

去る昭和三一年八月末経済安定本部統計研究会人口分科会によつて発表された昭和三二年までの推計人口は現下の乏しい資料を出来るだけ利用し、科学的な検討を加へたものであつて、單に人口問題研究上においそのみならず、新日本建設の基礎として實際の施策のあらゆる面で盛に利用されるものがある。従つてこの將來人口推計の結果を詳細に分析してその内容を明瞭にしておくことは人口問題研究上は勿論實際にこの推計を用いる上、おいても甚だ重要である。この推計作業と分担した本研究所においその分析を試みることが、このシカ大要を記して参考になりたいと思ふ。

本稿では人口問題研究上特に重要であると思われる推計將來人口の男女年齢別構成の変化、従つて將來人口増加の内訳、分析に限ることとし、人口増殖力の変化を明瞭にせしめるための経年率を算定、又所の全圖に於ける明瞭なる實際の人口増加との相違を明らかにするたため、テヌト算定別稿においそのを添へることとする。

なお推計方法の概要と結果とは経済安定本部統計研究会人口分科会「將來人口の推計に関する報告」に於て記してあるが、その中総人口の一部は分析に必要を限り本稿にも掲げた。

一 總人口の変動

本推計の基準となつた昭和三二年四月二十六日人口總数は七、三七三万で、同年一月一日には七、五八一万であるが、昭和三二年一月一日には、最大の値となる第一推計が八〇、九万、最小の値となる第二推計が七、八八三万に達する。

この中日本人以外の人口は基準人口では八六万、昭和二年一月には二六万、昭和五年には三七万であるが、
總人口に対する割合は基準人口において一%余を示し外は何れも三%に過ぎない。これらを除いた日本人人口
のみについてみると、基準人口は七、二八八万であるが昭和五年には第一推計は七、九八三万、第二推計は七、八五
七万となる。本推計の地域における昭和二年の總人口は六、八四三万であるが、基準人口は七、二八八万より五三
〇万多く、昭和五年には第一推計は一、一六六万、第二推計は一、〇四〇万少くなっている。本推計は日本人人口
に重点をおかぬ。又この以外の人口は上記の通り割合も僅少であるから以下日本人人口のみにして分析を進める。

(※表参照)

(1) 男女別人口構成の変動

基準人口において男は三、〇七五万、女は三、八一三万であるが、その性比は女一〇〇に付男九一・一を示し、昭和
三年及び

一九年人口調査における女一〇〇に付男は九一・一及び九一・一に比して男の割合は僅かに増加しているが、

昭和五年及び昭和二年の國勢調査における女一〇〇に付男は九一・一及び九一・一に比して六に比し、これはやはり女超

過となつてゐる。この後昭和三年までには男の割合は増加するが、昭和三三・三五年には変動が極めて僅かであり、昭和

三五年に第一推計は女一〇〇に付男九七・九となり、第二推計は同じく九八・一となる。第三推計の方がやや男の

割合が多くなつてゐるが、それでもなお昭和五年以前の如く男人口超過は付持たない。

(2) 男女別人口増加実数

昭和二年四月一日の五月月間に總人口の増加実数は二六八万の多きに達し、この中九割八分は復興及び引揚

第1表 男女別推計人口

(1) 總人口及日本人人口

年次	總人口			日本人人口			
	總數	男	女	總數	男	女	女100=付男
昭21.4.26	72,734	35,307	37,427	72,734	34,749	37,985	91.1
昭21.10.1	75,810	37,027	38,783	75,554	35,960	39,594	95.3
第1推計							
昭22.10.1	77,899	38,543	39,356	77,641	38,376	39,265	92.7
昭23.0.1	78,502	38,858	39,644	78,243	38,687	39,556	92.8
昭24.10.1	79,238	39,235	40,003	78,977	39,065	39,912	92.9
昭25.10.1	80,088	39,555	40,533	79,722	39,473	40,249	92.9
第2推計							
昭26.10.1	81,001	39,978	41,023	80,463	39,880	40,583	92.7
昭27.10.1	81,864	40,399	41,465	81,205	40,291	40,914	92.9
昭28.10.1	82,711	40,822	41,889	81,947	40,702	41,245	93.0
昭29.10.1	83,543	41,242	42,301	82,688	41,113	41,575	93.1
中央推計							
昭30.10.1	84,350	41,651	42,700	83,429	41,524	41,905	92.7
昭31.10.1	85,133	42,059	43,074	84,168	41,935	42,233	92.8
昭32.10.1	85,895	42,464	43,431	84,907	42,346	42,561	92.9
昭33.10.1	86,641	42,868	43,773	85,646	42,757	42,889	93.0

(2) 日本人以外的人口

年次	總數	男	女
昭21.4.26	257	168	89
昭21.10.1	258	168	90
昭22.10.1	257	167	90
昭23.10.1	258	170	88
昭24.10.1	262	170	92
昭25.10.1	265	172	93

以上の通りであるが昭和二十一年一月一日起至二十二年一月一日にかけても増加は二〇〇万の多きに上り、その人口は復員及引揚による増加となっている。(第2表 人口増減表参照) 昭和二十二年にはこの人口増加がないが、第1推計は六〇一八五万、第2推計は三〇万の増加となり、全期間には第1推計が六九九五万、第2推計は五六九〇万の増加となっている。

加、この中復員及引揚による増加が四四〇万あって、全増加の六割乃至七割を占めている。従って、全増加の中七割乃至八割は昭和二十二年までに増加するものと考えられる。

以上の中男は昭和二十二年

第2表 男女別推計人口の増加

期 間	人 数			率 (推計年=100%)			前年増 加率 (%)
	總 数	男	女	總 数	男	女	
昭21.4.26-21.10.1 第1推計	2,677	2,111	566	97	91	15	78.8
昭21.10.1-22.10.1	2,087	1,516	571	98	61	15	72.6
昭22.10.1-23.10.1	601	313	288	3	8	7	52.1
昭23.10.1-24.10.1	734	376	358	9	10	7	51.2
昭24.10.1-25.10.1	847	428	419	11	11	11	50.5
昭21.4.26-25.10.1 第2推計	6,748	4,744	2,204	95	127	58	78.3
昭21.10.1-22.10.1	1,987	1,470	517	25	60	13	73.9
昭22.10.1-23.10.1	362	200	161	5	5	4	55.2
昭23.10.1-24.10.1	364	191	153	6	5	4	55.5
昭24.10.1-25.10.1	317	178	141	4	5	4	55.7
昭21.4.26-25.10.1 中央教値	5,873	4,351	1,522	78	117	40	72.7
昭21.10.1-22.10.1	2,038	1,493	545	27	41	18	73.0
昭22.10.1-23.10.1	682	357	325	6	7	6	52.3
昭23.10.1-24.10.1	537	283	254	7	7	5	52.6
昭24.10.1-25.10.1	583	303	280	9	8	7	52.0
昭21.4.26-25.10.1	6,320	4,447	1,873	87	128	47	75.2

第3表 男女別増加人口中の10歳未満の割合の増加

期 間	人 数				率 (推計年=100%)			
	總 数	男	女	總 数	男	女	總 数	
昭21.4.26-21.10.1	2,677	1,375	1,202	56	100.0	52.0	2.0	
昭21.10.1-22.10.1	2,087	825	782	51.2	100.0	49.5	25.5	
昭21.4.26-25.10.1	6,748	2,204	1,978	27.8	100.0	28.1	29.5	
昭21.10.1-22.10.1	1,987	825	761	41.0	100.0	61.5	20.8	
昭21.4.26-25.10.1	5,873	2,201	1,978	37.5	100.0	36.7	25.7	
昭21.4.26-21.10.1	2,111	1,375	578	31	100.0	45.2	2.0	
昭21.10.1-22.10.1	1,516	825	616	27.0	100.0	54.5	27.1	
昭21.4.26-25.10.1	4,744	2,201	1,110	14.3	100.0	46.4	30.7	
昭21.10.1-22.10.1	1,470	825	616	22.8	100.0	56.7	15.5	
昭21.4.26-25.10.1	4,151	2,201	1,110	13.7	100.0	47.0	20.2	
昭21.4.26-21.10.1	566	-	566	13	100.0	-	72.8	
昭21.10.1-22.10.1	571	-	333	23.8	100.0	-	61.7	
昭21.4.26-25.10.1	2,204	-	1,110	13.1	100.0	-	60.3	
昭21.10.1-22.10.1	517	-	333	19.6	100.0	-	68.2	
昭21.4.26-25.10.1	1,522	-	1,110	15.2	100.0	-	57.6	

未では復員による増加が著しいので全増加の七割乃至八割に達してあり、全期間についても男の増加が第一推計四七四万、第二推計四一五万であるから全増加の七割に當っている。復員による増加があるだけ男の増加が大きいから、男の復員及び引揚による増加のしめる割合は全期間について七割乃至八割に對し、女の引揚による増加は四割乃至六割にとどまっている。

この復員及び引揚による増加を除いた一般増加は第一推計は二七五万、第二推計は一四九万で第一推計の半ばに過ぎないが、このうちで男のしめる割合はせよりと多く、特に第二推計の方がやや著しい。全期間の増加を戦前の國勢調査間の増加と比較すると男は一般増加だけをみれば戦前の例に比してはるかに少いが、復員及び引揚による増加を含めた全増加は従来に例のないほど大なる増加を示し大正一四―昭和五年における増加の約二倍に達している。女は引揚による増加がかなりあつてこのように著しい増加を示さない。

(3) 男女別人口の増加率

以上の増加実数から従来は増加率の理を以て、昭和二年四月一〇月及び男は六一%の高率を示し女は一五%で男の四分の一である。(下の表参照)昭和二年一月一〇月及び男は若干低下するかなお四〇%、四一%の高率を示し、女はやはり一五%、一三%に過ぎない。昭和三三―三五年には男女ほぼ等しく第一推計は七一―一%程度で僅かずつ高まるに對し、第二推計は四一―五%で第一推計の半ばに過ぎない。全期間についてみると男は一三七%、一一九%で戦前の最高を示した大正一四―昭和五年の七九%に比し一倍半以上の高率なると對し、女は五

八〇%で男の半分又は三分の一に過ぎず、戦前最低であった大正九一十四年の六五%にも及ばない。

要するに本推計による総人口は基準時から四年五カ月間に最大六九五万、最小五六七万を増し基準人口の七〇%に及ぶ。

此九五%、七八%を増加し、戦前の各國統計表間においても例を見ないほどの大増加を示している。この中、復員

及び引揚による増加が四四%で六割乃至七割を占めている。従つてその全期間増加の七割乃至八割に当る四七七

万、四六七万は昭和二二年一月までの僅か一年五カ月間に増加することとなる。しかも増加總数の七割は

男、増加で女の増加は男の半分或はそれ以下に過ぎない。勿論男は復員及引揚による増加が著しく多く男の全増

加の七割から八割に當つてゐる爲である。以上の結果推計人口の性比は基準時の七一〇に村男九一から昭和二五

年の同じく九八へと男人口の割合を増したといふか、なほ戦前、男人口超過にまで到達した。

三 生産年令人口増加

總人口の変動は以上の通りであるが、此と共に年令三区分別即ち幼年人口(一四%)、生産年令人口(二五)

五九%)、老年人口(六〇%以上)に別けて、その変動を明らかにしよう。

(1) 年令構成の変化

基準人口においては老年人口が總人口の七・九%を占めてゐるか昭和二二年までは実数とともにならぬが、以

後幾度推計表三推計とほぼ同様の變動が、昭和二五年に七・四%、七・五%を占めるのに対応して、幼年人口は

基準人口で五五・九%をとり実数は昭和二三年まで増してきて、後減りしたが、率は基準人口から引いた増減に依

じて昭和二五年に約三三%となる。そこで出生率令人口は基準人口の五六・二%から実数にともなう率が次第に増し

て昭和二五年には五九%、六〇%、多きものなることとなる。但し表参照。昭和一〇年と比較すると、老年人口

は実数が六〇・一八%多し、かつ率は母上人と異なり、幼年人口は基準人口が実数六四万多く、率はやや少いが、

昭和二五年に実数は第一推計が五六万多く、第二推計は僅か一万多し、率は約四%少くなる。従つて出生率令人口は基準人口では実数三三セ万多し、率は僅か多し、昭和二五年には実数が八五八一八

七八万多し、率は四%多くなる。これを男女別にみると老年人口は男女とも昭和一〇年とほとんど同程度であ

るが、幼年人口は男性は基準人口において既に昭和一〇年より少く昭和二五年にはますます少くなる。これに

対し、生育率令人口は基準人口においては昭和一〇年と比して実数・率ともに男はやや少く女は多し、昭和二五

年に至る間女性は僅かの変動を示すのみならず、男は約四%を増大して昭和一〇年よりも多くなる。そして以上の傾向

は男女とも第一推計の方が著しい。

昭和二五年における第一推計の差は実数は幼年人口の差が最も著しく四七一四八万に達する。率では老年人口は算しく、生育率令人口は第一推計の方がやや少くなる。ただだけ幼年人口は第二推計の方が少い。特に女の幼年人口は第一推計において実数と昭和一〇年より少くなつてゐる。

即ち、近い将来における出生率令人口の増減並びに比率の増大は幼年人口と対して、特に男の方が著しく、さらに比率は第一推計の方が一層著しい。しかもなお出生率令人口における性比は、昭和一〇年の女一〇〇に付男八

一〇三に比して、基準人口は八七から昭和三五年の九八へと恢復している程度である。

(2) 生産年齢人口の増加と削減

年令三区分別の増加数をみると生産年齢人口が圧倒的に多く第一推計は六四一〇万の増加総数、九割三分の多きに達し第二推計は六二一〇万の減少人口の減少が著しい為増加総数より多く存している。(表五参考) この中復員及び引揚による増加が五割五十分を占め、一般増加は二六六一二八六と存している。従って昭和二三年までの増加が著しく全期間増加の七割に当っている。昭和二二―二五年にも増加数は次第に大なりなり毎年六〇―六七方に達しており、第二推計の方が多し。

生産年齢人口増加は、男女とも毎年各増加総数の九割以上を占め期間によっては増加総数以上に達し、第二推計ではその二倍以上に達している。しかし生産年齢人口増加の七割は男の増加で女の増加は男の半分を過ぎない。

男増加の中復員及び引揚による増加のしめる割合は昭和二一年四月一〇月には九割五分にと達し昭和二一年一〇月

一―二三年一〇月には七割七分、全期間には六割七―八分に当っている。女増加の中引揚による増加のしめる割合は

昭和二一年四月一〇月には八割三分に達するが、昭和二一年一〇月―二三年一〇月には四割強となり、全期間には

約三割となっている。即ち男の増加の多いのは専ら復員によるもので、これに引揚による増加を除いた一般増加は

全期間では男が一四一―一四八万に對し女は一三三―一三九万で男の方がやや多い程度である。この一般増加は

過去の國勢調査の中この年令階級が最大の増加を占めた昭和三四年の増加に男が最も匹敵する。それでは

第4表 男女年令了区分別推計人口

年次	總數						男						
	總數	0-14	15-24	25-34	35-44	45以上	總數	0-14	15-24	25-34	35-44	45以上	
實數													
昭21.4.26	72,876	26,184	40,220	5,771	34,747	13,246	10,885	25,229	38,126	13,950	21,734	35,322	
昭21.10.1	75,554	26,499	40,204	5,752	34,860	13,276	20,581	25,220	38,172	13,102	20,865	35,319	
第一推計													
昭22.10.1	77,141	26,628	40,272	5,740	34,976	13,463	22,372	25,220	38,265	13,112	20,890	35,320	
昭23.10.1	78,249	26,649	40,912	5,781	34,689	13,429	22,722	25,338	38,556	13,121	20,891	35,322	
昭24.10.1	78,977	26,526	40,574	5,877	34,065	13,423	20,059	25,338	37,712	13,102	20,815	35,274	
昭25.10.1	78,824	26,504	40,335	5,985	34,493	13,414	20,612	25,338	37,331	13,087	20,893	35,272	
第二推計													
昭22.10.1	77,523	26,558	40,252	5,733	34,330	13,423	22,315	25,338	37,213	13,129	20,867	35,219	
昭23.10.1	77,905	26,300	40,352	5,749	34,351	13,300	22,702	25,225	37,370	13,000	20,850	35,272	
昭24.10.1	78,267	26,182	40,452	5,814	34,722	13,147	20,019	25,226	37,527	12,935	20,845	35,258	
昭25.10.1	78,568	26,153	40,332	5,881	34,900	12,936	20,375	25,297	37,689	12,819	20,857	35,272	
中央數値													
昭22.10.1	77,572	26,172	40,262	5,738	34,353	13,446	22,309	25,118	37,239	13,146	20,870	35,220	
昭23.10.1	78,070	26,427	40,382	5,735	34,610	13,366	22,712	25,332	37,664	13,060	20,870	35,233	
昭24.10.1	78,618	26,254	40,514	5,845	34,993	13,285	20,038	25,270	37,920	12,968	20,875	35,236	
昭25.10.1	79,196	26,030	40,233	5,938	34,196	13,177	20,468	25,111	37,000	12,813	20,825	35,222	

割合 (推計人口=100.0)

昭21.4.26	100.0	35.9	56.2	7.9	47.7	18.2	26.1	3.5	52.3	17.8	30.1	46.4
昭21.10.1	100.0	35.1	57.3	7.6	48.8	17.7	27.7	3.3	51.2	17.3	29.6	46.3
第一推計												
昭22.10.1	100.0	34.3	58.3	7.4	49.4	17.3	28.8	3.2	50.6	17.0	29.5	46.2
昭23.10.1	100.0	33.9	58.7	7.4	49.4	17.2	29.0	3.2	50.6	16.8	29.6	46.1
昭24.10.1	100.0	33.6	59.0	7.4	49.5	17.0	29.2	3.3	50.5	16.6	29.8	46.2
昭25.10.1	100.0	33.2	59.3	7.5	49.5	16.8	29.4	3.3	50.5	16.4	29.9	46.2
第二推計												
昭22.10.1	100.0	34.2	58.4	7.4	49.4	17.3	28.9	3.2	50.6	16.9	29.5	46.1
昭23.10.1	100.0	33.8	58.7	7.4	49.5	17.1	29.1	3.2	50.5	16.7	29.7	46.1
昭24.10.1	100.0	33.2	59.4	7.4	49.5	16.8	29.4	3.3	50.5	16.4	29.9	46.2
昭25.10.1	100.0	32.5	60.0	7.5	49.5	16.5	29.8	3.3	50.5	16.1	30.2	46.2
中央數値												
昭22.10.1	100.0	34.3	58.3	7.4	49.4	17.3	28.9	3.2	50.6	16.9	29.5	46.1
昭23.10.1	100.0	33.8	58.8	7.4	49.5	17.1	29.1	3.2	50.5	16.7	29.7	46.1
昭24.10.1	100.0	33.4	59.2	7.4	49.5	16.9	29.2	3.3	50.5	16.5	29.9	46.2
昭25.10.1	100.0	32.9	59.6	7.5	49.5	16.6	29.6	3.3	50.5	16.2	30.1	46.2
昭10.10.1	100.0	36.9	55.7	7.4	50.2	18.3	28.2	3.3	48.8	18.3	27.4	46.1

第五表 男女年令及區分別推計人口增加

年次	總數			男			女						
	總數	0-14%	15-59%	60%以上	總數	0-14%	15-59%	60%以上	總數	0-14%	15-59%	60%以上	
實數													
第一推計													
第二推計													
中央數值													

年次	率(各前年=1000)			男			女						
	總數	0-14%	15-59%	60%以上	總數	0-14%	15-59%	60%以上	總數	0-14%	15-59%	60%以上	
第一推計													
第二推計													
中央數值													

復興及び引揚による増加を含めた全増加は男については右の増加の二・八倍、女においては二・三―二・四倍の數増となるわけである。

次に幼年人口についてみると生成年令人口とは全く反対に昭和二三年までは増加で昭和二年四月一〇月には増加總數の一割強、昭和二年一〇月―二三年一〇月には同じく六分であるが以後減少に転じて全期間に第一推計は三三万の増加なかに對し、第二推計は六三万の減少となっている。昭和二三年までの増加と引揚が五九万ある為でこれを除いた一般増加のみをみれば各期間とも減少を示し、第一推計は漸次その程度を減じて全期間に二七万の減少となるのに對し、第二推計は各期間その減少數著しく多くしかと毎年その度を増して全期間には第一推計の四倍半、一三三万の減少となっている。

男女を比較すると一般に女の増加は男よりも少くその減少は男よりも多い。昭和二年四月一〇月における女の増加は男よりやや少く、一般増加の減少は男よりも多く、増加總數に對する割合は男よりも多い。昭和二年一〇月―二三年一〇月の一般増加と減少とやはり男よりもやや多い。昭和二三年―二五年には第一推計では男女ともその減少の度が少しつづつくなるが、女は男よりも毎年七千―一万多くなつており、第二推計では男女とも第一推計よりも著しく多くしかと毎年その度を増すが女は男よりも四―八千多い程度である。全期間の一般増加と女は男より減少の度がやや多いが、第二推計の減少は男では第一推計の五倍なかに對し女は四倍に過ぎない。

幼年人口の増加は第一推計でも過去の國勢調査間の増加に比して一割四分から二割にしか當らず、第二推計の

絶対減少の加まはるる経験しなかつたところである。

さうして老年人口についてみると、幼年人口とは反対に昭和三二年までは引揚があるにもかかわらず減少を示しているが、これ以後は増加に転じて全期間に第一推計は二二万、第二推計は二二万の増加で増加總数も三二五分百過ぎない。引揚の増加を除いてみると昭和三二年四月一日の月は一般増加は約六万の減少で、昭和三二年一月一日三二年一月にはやはり減少であるが、度を減じて第一推計は三万、第二推計は四万の減少となる。昭和三二年以後は増加となり、毎年その度を増しているが、第三推計は第一推計の半分に過ぎない。全期間の増加の中引揚による増加は第一推計は三割弱、第二推計は五割強をいれ、一般増加は第一推計は一六万、第二推計はその三分の一で五万となっている。

以上老年人口の増加の中一般に男の方が減少の度が女より少ないが、増加の度も女より少ない。ただし全期間についてはこれは第一推計の増加は男の方がやや少ないが、第二推計では女の方がやや多い。即ち昭和三二年四月一日の月の減少は女の半分であるが、一般増加のみをみると減少の度は男がやや少ない程度である。昭和三二年一月一日三二年一月には男の減少の方が女よりやや少ないが、一般増加の減少は等しい。全期間について一般増加のみをみると第一推計の増加は男の方がやや少ないが、第二推計では男の方がやや多い。さうして増加を昭和三二年一月一日と比較すると第一推計の男は七割、第二推計の女は三割三分に過ぎない。一般増加のみを比較すれば三二九一―一四年の増加数は二割である。

(3) 年令三区分別増加率

増加率において、またと同様に増加率は生産年令人口が最も高く、昭和二年四月一日の五カ月間に五八%といふ高率を示し、昭和二年一月一日に二五年一月にはやや低下して四五%となる。以後はこゝ三割程度となり、昭和二四、二五年には若干高まるが全期間は一五七%、一五二%を示し、總數は三倍並の高率となつてゐる。

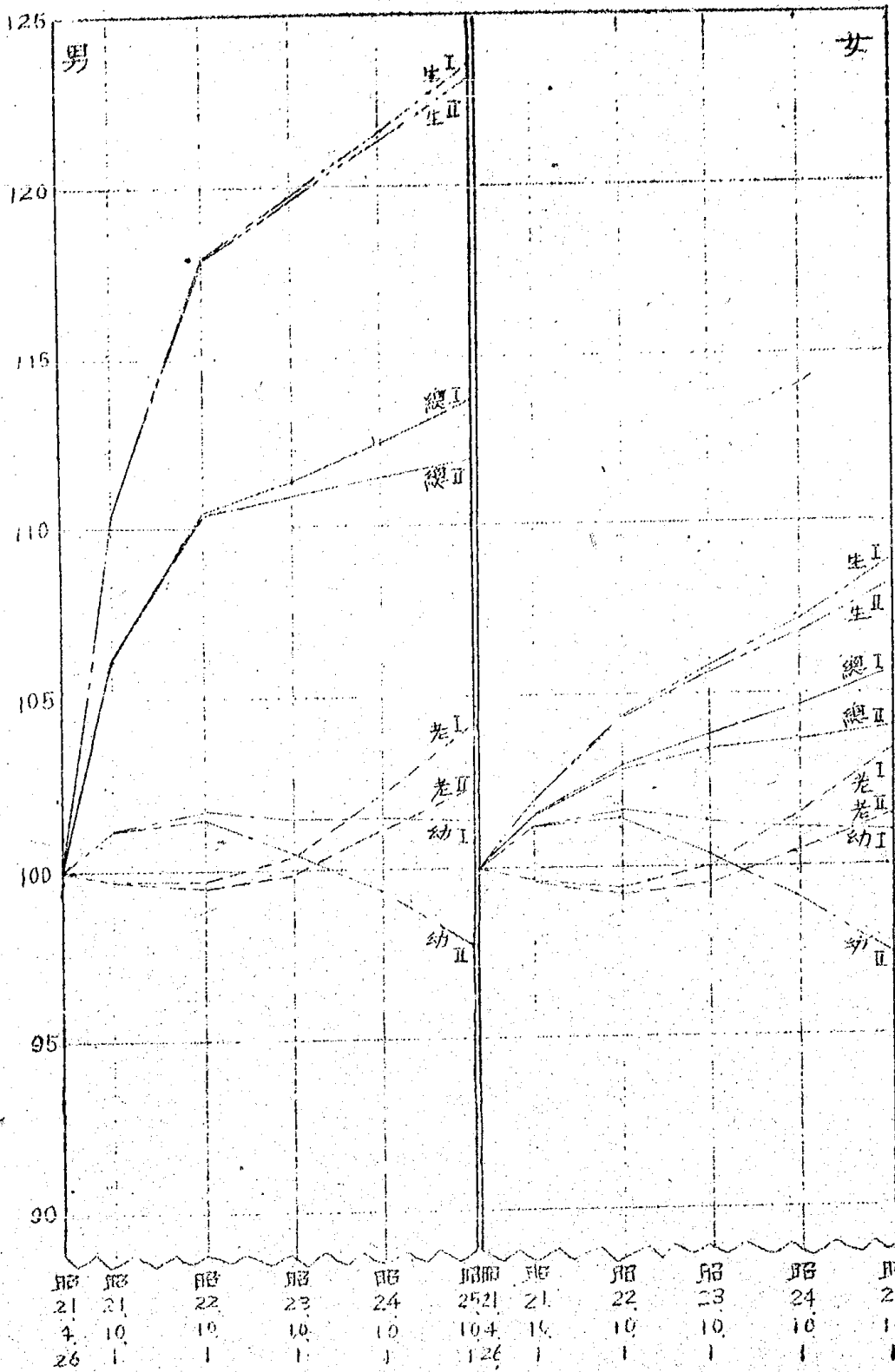
昭和二年四月一日に男は一〇三%で女の五倍の高率を示し、昭和二年一月一日に二五年一月に男は六九%で前期間より低下するが、なお女の三倍の高率である。昭和二一、二五年には男女の差はほとんどなくなり、男せとも第一推計では昭和二一、二五年に老年人口の増加率よりやや低下してゐる。しかし全期間には第一推計と第二推計の差は四%、六%に過ぎないが、男は二五九%、二三一%で女の二六二%、二八倍の高率となつてゐる。女の全期間の増加率は大正一四、昭和五年の率にほぼ等しいが、男はその二、六倍となつてゐる。

次に幼少年人口は昭和二年四月一日には一三%で生産年令人口の五分の一に過ぎず、昭和二年一月一日に二五年一月には低下して五%、二%となる。以後は減少に転じて第一推計は(一)三%から(二)一%とその度を減ずるのに対し、第二推計は(一)一〇%から(二)一六%と、その度を増してゐる。全期間に第一推計は一三%で生産年令人口の八分の一に過ぎず、第二推計は二四%の減少となつてゐる。この階級では男女とも率の傾向がほとんど同様である。また全期間に第一推計の増加率が男の方がやや高く、第二推計の減少率は女の方がやや大となつてゐる。全期間の第一推計の率は過去に最低であつた大正一四、二五年の二割にと達しないう低率である。

さうして老年人口は昭和二年四月一日の月三〇%の減少で昭和二年一月一日の月には第三推計は前期間と同様であるが第一推計は一〇%の減少となる。昭和二年一月以後は増加に転じ毎年その率が高まるが、第一推計は第二推計よりも僅かに高い。全期間に前者は三七%で幼年人口の三倍であるのに対し、後者は一九%で前者の半分に過ぎない。第一推計では昭和二一五年には其老年人口よりもやや高くなっている。又第一推計第二推計とも女性男に比し減少の度はやや多く増加の度はやや少くなっている。そして全期間には第一、第二兩推計ともその男は四一%、二四%なのに対し女性は三四%、一五%である。男は八割、六割強に過ぎない。全期間の率は男は大正一四一昭和五年の率を第一、第二兩推計の間におり女性過去に最低であった大正一四一昭和五年の一〇%より僅かに高い程度である。

以上要するに男女とも幼年人口は第一推計は微増で、第二推計は過去に例をみない絶対減少を示し、いかんぞこれが著しい。老年人口は増加するといへ、過去の例に比してそのほど著しくない。よかるに生産年令人口は男に於いては復算及び引揚による増加によつて昭和二二年までに著しく増加し、女も亦引揚によつて昭和二二年までにかなり増加を示し、以後は増加も男女とも他の階級に比し頗る多い。全期間には過去に比をみないほど大なる増加となつてゐる。一般増加のみをみても、過去の最大の増加数に匹敵する増加を示している。近い将来における人口増加はこのような短期間に、このような規模をおいておこなふのであり、特にそのほとんど大部分が生産年令人口であり、その増加数が幼年人口の減少を蔽ふて尚著しい増加を示すことは注目し値する。

第1図 年令3区分別推計人口の増加 (昭和21年4月26日=100)



以上年令三区分別に於て推計人口の増加傾向を一層明らかにする爲に、基準人口を100とする指数によつて
 図示したものが次に掲げる第1図である。

註
 ① 総總數
 ② 幼0-14歳
 ③ 生15-59歳
 ④ 老60歳以上
 Iは第1推計 IIは第2推計を示す。

三 五歳階級別觀察

さらに以上の変化を詳細に検討する為には年令五歳階級別に觀察することとする。

(1) 年令五歳階級別人口構成の変動

老年人口は昭和二一年四月一〇月に実数、率ともに減少することは既に記した。これを五歳階級別にみれば、その各年令階級が減少する為である。(第6表参照)昭和二一年一〇月以後の比率の変化は著しくない。

又、幼少年人口の率が基準人口から引きつづき減少するのほその各階級とも減少する為であるが、中でも〇―四歳は各年令階級の中最も著しい減少を示し、一―四歳もこれについて全期間に減少となっている。これに反して生産年令人口の比率の増大は、二五―二九歳が最も著しく、三〇―三四歳がこれについて著しく拡大する結果である。

以上の傾向は増減とも第三推計の方が一層著しい。昭和二五年において第一推計が第二推計よりも実数の多いのは推計の仮定により当然であるが、〇―四歳の差は特に多く、八〇万の差となっている。

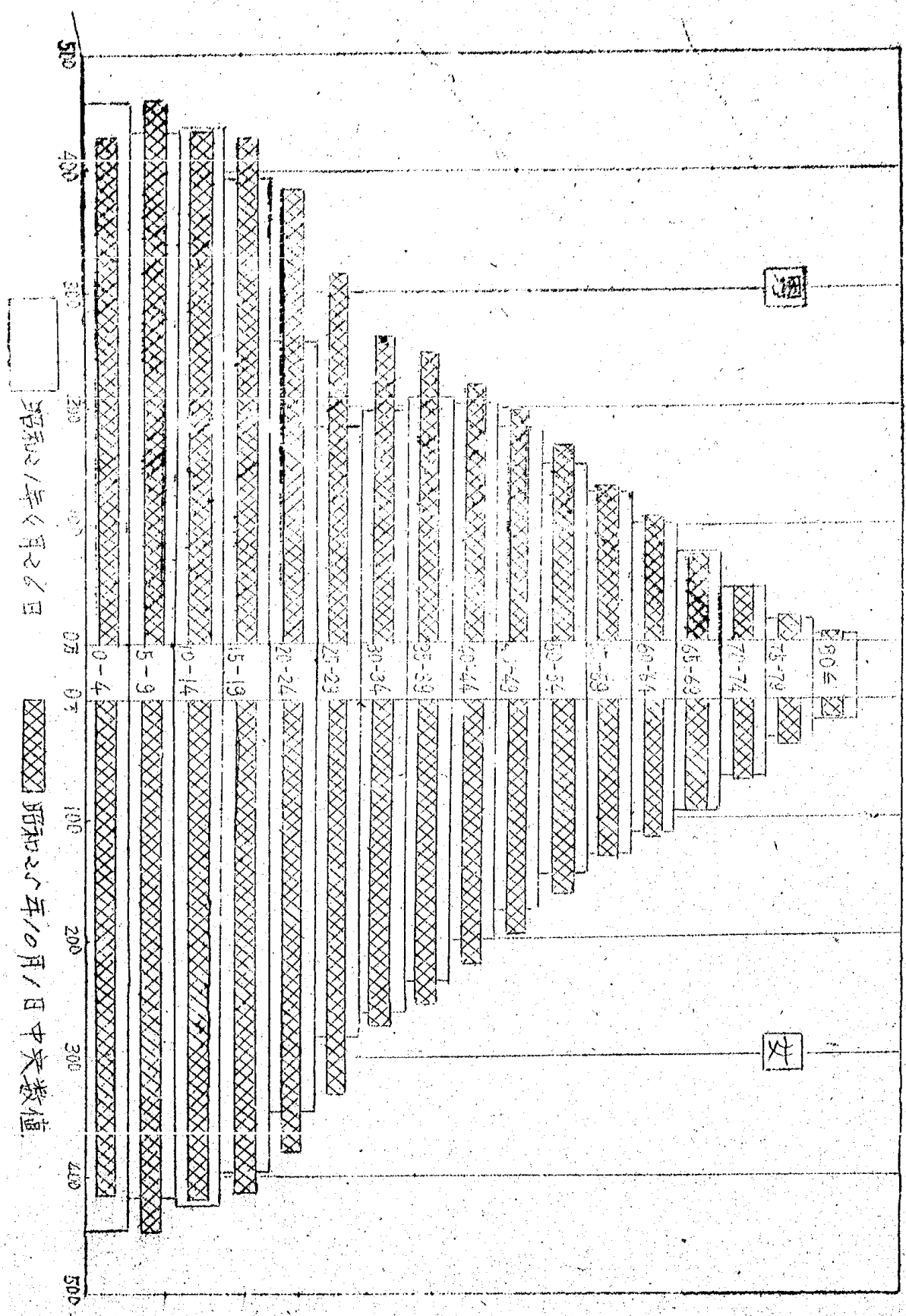
昭和二五年と昭和一〇年と比較すると一五―一九歳は実数が一八〇万、率も一%大となってその拡大が最も著しく、二〇―二九歳、三〇―四四歳の各階級もこれについて増大している。これに反して、〇―九歳の率は縮小しており、特に〇―四歳は基準人口において既に昭和一〇年に比し実数、率ともに少いのに昭和二五年において実数は第一推計四四万、第三推計はその三倍一三三万という著しい縮小を示し、率もまた二四―三%の縮小となっている。

基準人口において実数、率ともに昭和一〇年に比して男が少いのは二〇―三四歳の各階級の少い為で、女が多いのは

表6 男女年令人口構成 (總人口=100)

年令階級	男		女		計		總數
	絕對數	百分比	絕對數	百分比	絕對數	百分比	
0-4	1000	100.0	1000	100.0	2000	100.0	2000
5-9	950	95.0	950	95.0	1900	95.0	1900
10-14	900	90.0	900	90.0	1800	90.0	1800
15-19	850	85.0	850	85.0	1700	85.0	1700
20-24	800	80.0	800	80.0	1600	80.0	1600
25-29	750	75.0	750	75.0	1500	75.0	1500
30-34	700	70.0	700	70.0	1400	70.0	1400
35-39	650	65.0	650	65.0	1300	65.0	1300
40-44	600	60.0	600	60.0	1200	60.0	1200
45-49	550	55.0	550	55.0	1100	55.0	1100
50-54	500	50.0	500	50.0	1000	50.0	1000
55-59	450	45.0	450	45.0	900	45.0	900
60-64	400	40.0	400	40.0	800	40.0	800
65-69	350	35.0	350	35.0	700	35.0	700
70-74	300	30.0	300	30.0	600	30.0	600
75-79	250	25.0	250	25.0	500	25.0	500
80-84	200	20.0	200	20.0	400	20.0	400
85-89	150	15.0	150	15.0	300	15.0	300
90-94	100	10.0	100	10.0	200	10.0	200
95-99	50	5.0	50	5.0	100	5.0	100
總計	10000	100.0	10000	100.0	20000	100.0	20000

表之四 男女五歳階級別推計人口比較



一五―二四歳、三〇―四四歳の各階級の多き為である。昭和二年一月以降男女とも老年人口の比率の変化はほとんど認められない。生産年令人口の中では男女とも二五―二九歳の比率の拡大が著しいが、男は他の他に二〇―二四歳、三〇―三九歳の各階級の拡大も著しい。これに対し、其他の年令では減少する階級の方が多くなっている。幼少年人口は各階級とも縮小し、一四歳が著しい階級に推計において著しいことは男女とも同様である。女ではこの幼少年人口以外の各階級の比率も変動は男程著しくない。

又、昭和五年と昭和一年と比較して一五―一九歳の増加と一四歳の減少が著しいのは男女とも同様であるが、男では二〇―二九歳、三五―三九歳、四五―四九歳の各階級は実数が増大しているが率は縮小している。男女とも第一推計と第二推計との差は、一四歳が最も著しい。四一―四六の方差を示し、五―三四歳の中には第二推計の率が多い階級もある。

このように男においては基準人口では戦前戦後による戦耗と復員、引揚の了らない為は生産年令の中で二〇―二九歳は著しく少いが、昭和五年までの比率は拡大は特に著しい。女は一般に男のような増加はないが、二五―二九歳の増加はやや著しい。男女とも一五―一九歳の比率は昭和一年に比して著しく増大しているのは過去に出生数の大であった現われのみから見る。これに反し、幼少年人口の中で男女とも一四歳が、基準人口において既に昭和一年よりも実数、率とも少いが、昭和五年までは縮小してゐる。これは推計の仮定である出生率の低下と戦時中の出生数の減少によるものといえよう。

以上の五歳階級別人口構成について基準人口と昭和二五年(中央教値)とを比較し、その結果を比較したものが表二である。

(2) 年令五歳階級別増加実数

生産年令人口は三〇―三四歳、五五―五九歳に例外あり、外は各年令階級とも毎年増加を示している。特に二〇―三九歳回復及び引揚による増加によって圧倒的に多い。即ち、昭和二年四月一日の二〇―三九歳に達し、生産年令人口増加の八割五分をしめている。昭和二年一月一日の二〇―三九歳は二〇―三九歳が一〇〇万の増加を示し、その後も毎年他の階級に比して増加が多い。又、全期間には二〇―三九歳は一六三、一六七万、二五、二九歳は約八〇万の増加を示している。この中、回復及び引揚による増加が、その約八七万、一〇五万に達し、一般増加は七〇―八〇万に達している。又、一五―一九歳及び三五―三九歳も他に比して増加数が多い。二〇―三九歳のみは一般増加が、第一推計は極めて僅少で、第二推計では減少となっている。このように二〇―三九歳各階級は、何れも昭和二年四月一日の増加の中、六―七割は回復による増加であり、その他は二―三割は引揚による増加であり、残りの一割は一般増加に二〇―三九歳を除いては著しくない。従って、これらの階級にまいては全期間増加の半、概して六割以上は昭和二年一月一日までにおこるのである。

以上の傾向は回復による増加が、それだけ男の方が著しい。即ち、昭和二年四月一日の二〇―三九歳増加の中、男は一七二万で、生産年令人口増加の九割に近いか、女は三〇万に過ぎない。男女比は二〇―三九歳の増加が最も著しいが、その

全期間の増加は男は約二五九万なりに対し、女は約八五万を若干三分の一に過ぎない。この中一般増加は男九〇万に
に対し女は五九一六三を以てやはり男の方が多い。その他の階級は一五―一九歳、三五―五四歳の各階級は毎年増
加が多く、従つて全期間の増加が著しいこと。それら、一般増加を少なくないこと。さらに三〇―三四歳のみは一般増加
が減少の例外であること等は男女とも同様である。しかし一般に女は男より各階級に著しい差はみられない。戦
前の国勢調査間には最も増加が多かつたのは昭和五―一〇の年の一〇―一四歳で男女各四四万であつたから、第一推計にお
ける女二五―二九歳の五〇万はこれに較べるとやや多い程度であるが、男二五―二九歳の二二九万は三〇―三四歳に上つて
いる。

幼少年人口の中では五―九歳の増加は昭和二四―二五年に減少して以後各年が年々の増加を示し全期間に五五万、五
九万、増加となつて一般増加は約四〇万に上る。しかも一〇―一四歳は昭和二一年四―一〇月に引揚が一六万あるにか
かわらず約八千の微増で一般増加は一五万の減少であり、以後第一推計は毎年約一五万の減少を示し昭和二四―二五年
に増加一〇〇、全期間に一六万を減少する。これに対し第二推計は毎年第一推計の割合による減少をつつて全期間に一
〇五万の減少を示している。一般増加は第一推計四二万、第二推計一三一万といふ著しい減少である。一〇―一四歳
は昭和二三年までは増加するが以後減少をつつて結局全期間には減少となつてゐる。

幼少年人口の中五―九歳の増加することと男女とも同様で一般増加はほとんど同程度である。一〇―一四歳は減少をつ
つて全期間には第二推計が第一推計の六倍以上の減少で、一般増加も第一推計二〇―二二万、第二推計はその三倍六四

一六七万の減少となることも男女同様であるが、その方が幾分多い。一〇一四歳の全期間の一般増加も男女同様の減少であるが、その方がやや著しい。男女とも一四歳は全期間の減少の中、第一推計は八割強が、第二推計は逆に二割が昭和二年四月一と三年一月に減少することとなる。又、第一推計と第二推計の差は、一四歳のみ著しく男四六万、女四三万の多きに達している。過大においては、大正九一四年の六〇一六四歳の男四万九千、女三万八千の減少が最も著しい例であるから、これに較べて第二推計の一四歳の減少は男一倍、女三倍という著しいものである。

さらに老年人口の中では、第二推計の六五―六九歳及び八〇歳以上はほとんど各年減少しているが、これ他は増加の方が多い。第一推計の七〇―七四歳は毎年増加を示している。しかし、昭和二年四月一〇月には七〇―七四歳の減少、昭和二年一月一〇月―三年一月一〇月には七〇―七四歳及び八〇歳以上の減少となつて、この引揚による増加があつても一般増加の減少がこれより多い為である。老年人口においては、その増加の方が男よりもやや多い。男の七〇―七四歳は減少を示している年次があり、又男は總数におけると同様の傾向であるが、女は全期間において、七〇―七九歳及び第一推計の六〇―六四歳をのぞいて一般増加が減少を示している。

(3) 年令五歳階級別増加率

五歳以上のよう増加率を率によつて、これは第一表の通り

生着年令人口の中にも、二五―二九歳が最も高率を示し、昭和二年四月一〇月には一三九%、昭和二年一月一〇月には

二年一月には九五%、九四%の高率を示し、以後毎年程度を減じつつも他の階級に比して高率を全期間には三八五%、三八%を示している。これについて三〇―三四歳と同様に高率を全期間に二七六%、二七一%を示している。これらより下つて三〇―三四歳、五〇―五四歳の各階級も高率を方である。全期間には五五―五九歳が最低を示している。

男女別にみれば、五五―五九歳は男の方が著しく高く昭和二年四月―十月には三〇・八%で女の一倍に達し、昭和二年一月―三月、二年一月には一六・六%で女の約五倍に、全期間には七一%、七一%で女の四倍に当り各年令階級中最も高率である。二〇―三四歳の男も昭和二年四月―十月には二三五%で女の八倍に上り、昭和二年一月―三月、二年一月には一三一%、一三〇%、全期間には五一三%、五一〇%で女の五倍に上っている。しかし女の中では三〇―三四歳の階級が他に比して高率である。これらに他に男では三〇―三四歳、五〇―五四歳が毎年高率を示し、女では三五―三九歳、四五―四九歳が昭和二年四月―三月、二〇―二九歳に匹敵する高率を示してあり、四〇―五四歳の各階級は昭和二年以後他の階級に比して高く、全期間に一〇〇%前後の高率となっている。全期間の率はより年令階級の例外を除いては男より低率である。戦前では大正一四―昭和五年における八〇歳以上の五九%が最高で、五〇―五四歳の一五五%がこれについているからこの推計では總数の三〇―三四歳の増加率が大体これに近いため、三〇―二九歳の増加率の如きは過去に例をみない著しい増加である。このように男は基本人口の五割から七割を増しているのに対し、女は三割ほどでなく、二〇―二四歳のみはほぼ過去と同程度の増加率となっている。

表 7 男女年齡之異階級別推計人口之增加 (1) 歲數

年齡階級	1951年		1952年		1953年		1954年		1955年		總計
	總數	推計	總數	推計	總數	推計	總數	推計	總數	推計	
0-4	2559	155	2009	155	1968	155	1968	155	1968	155	5083
5-9	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
10-14	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
15-19	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
20-24	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
25-29	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
30-34	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
35-39	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
40-44	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
45-49	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
50-54	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
55-59	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
60-64	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
65-69	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
70-74	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
75-79	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
80-84	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
85-89	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
90-94	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
95-99	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
100+	199	155	199	155	199	155	199	155	199	155	1042
總計	2559	155	2009	155	1968	155	1968	155	1968	155	5083

表A 男女年齡階級別推計 (各前年=1000) 人口の増加

年令階級	推計					推計					推計
	1940	1941	1942	1943	1944	1940	1941	1942	1943	1944	
0-4	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
5-9	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
10-14	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
15-19	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
20-24	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
25-29	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
30-34	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
35-39	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
40-44	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
45-49	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
50-54	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
55-59	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
60-64	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
65-69	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
70-74	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
75-79	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
80-84	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
85-89	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
90-94	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
95-99	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
總計	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133

幼年人口の中で五―九歳は昭和二一年四―一〇月には三三%で他の三階級に比し高く、以後も昭和二四年まで他より高い増加率を示し、昭和二四―二五年に(一)三三%を示すが結局全期間には六九%、六五%の増加となっている。男女とも同様な傾向を示すが全期間の率は女の方が幾分低い。一から三―四歳は昭和二一年四―一〇月には僅か一%に過ぎず、その後第一推計は昭和二四年まで毎年一六%前後の減少を示し、昭和二四―二五年に三三%の増加を示すが全期間には結局一八%の減少となつてゐるのに対し、第二推計は毎年第二推計より減少率高く、昭和二三―二四年に(一)五三%の減少を示し全期間に第二推計の六倍の一六六%という著しい減少率を示してゐる。男女とも同様の傾向であるが、女の方がやや程度が低い。三―四歳の著しい減少は過大において最も著しい減少を示した大正九―一四年における六〇―六四歳の(一)五三%に比して男女とも数倍の減少である。

老年人口中七五―七九歳は昭和二一年四―一〇月には一九%の減少であるが、以後増加に転じて昭和二三―二五年には全年令階級の中最も率を示し、全期間に第一推計は二七%、第二推計は一三五%の増加となつてゐる。ただし男は毎年増加をつつてゐるが、全期間には女の方が男よりもはるかに高い率を示してゐる。八〇歳以上は全期間に第二推計七六%、第三推計一二七%の減少を示してゐるが、男の方がその度かけるかに強い。八〇歳以上のこの甚だしい減少率は過大において最も減少の著しかった大正九―一四年における六〇―六四歳の(一)五三%に比して男女とも数倍という減少である。老年人口の中六五歳以上は全期間においては女の増加率が男よりもやや高率を特して七五―七九歳において著しい。

全年令階級を通じて第一推計と第三推計との差は概ね六%以下に過ぎないが男女とも一四歳のものは一%の差前後の差を示し、又老年人口は年令が高まるに従い、その差が大となる。

以上要するに男女とも昭和二三年までの増加が著しく、全期間については生産年令人口の中で男女とも二〇―二九歳の増加が著しい。特に男においては五年間に五―七割を増加する激増振りである。勿論後真による増加がこの年令階級に集中する為であるが、一増増加も男女とも一五―二九歳の各年令階級においては少くない。一かるとこれと全く反対に一四歳は第一推計と第三推計とも男女とも絶対減少を示している。その減少率は男女とも同様で全期間において第三推計は第一推計の六―七倍の高率となつて過大に例を見ない著しい減少を示している。これに推計の仮定である出生率の低下によることはいふまでもない。一〇―一四歳も減少しているが五―九歳の多少増加していても幼年人口としては微増又は減少となつてゐる。老年人口は僅かな増加を示すのみで過去の増加と大なる差はなく特に問題はない。ただ七五―七九歳の増加率が高く、八〇歳以上も率として相当著しい減少であるのが注目される。即ち近い将来における生産年令人口の激増を立ち上つてみれば生産年令人口の中でも一五―三九歳の各階級において特に男において著しい異に問題があり、一四歳の絶対減少ととも注目される。長びく程度は率によつて、又過去との比較によつてそのことを知ることが出来た。

以上推計將來人口について詳細に分析して得た結果の中主要な事項を摘記すれば次々通りである。

(一) 昭和三五年における性比はせ一〇〇に付男九八で、基準人口の九一からみれば大分男人口を増してはいるが、なお戦前の男超過にまでは恢復しない。

(二) 老年人口の比率はほとんど変動がないが、幼年人口は基準人口において既に昭和一〇年より少いのに昭和三五年にはさらに縮少して第三推計では実数と多少少くなる。これは特に生産年令人口、特に昭和三五年までに女は僅かに増し男は著しく増大する。以上の傾向は第三推計において特に著しい。

(三) 生産年令人口の中で二〇―二九歳の比率の増大が著しい。一五―一九歳の比率は昭和一〇年比に著しく比率を拡大する。幼少年人口の中では男と女の二―四歳の比率が著しく減少しており、これは特に第三推計において著しい。

(四) 総人口は基準年時から四年五月間に最大六九五万、最小五六九万を押しこめるが、この中復員及び引揚による増加が四〇〇万に達する。六割乃至七割を占めており、従って全期間の増加は七割乃至八割は昭和三五年一〇月までに増加するものである。

(五) 増加総数の七割は男の増加で最大四七四万、最小四一五万に達し、女の増加は男の半額以下に留まる。男の増加の中七割乃至八割は復員及び引揚による増加、女の増加の中四割乃至六割は引揚による増加である。

左の通り男の増加の中七割乃至八割は復員及び引揚による増加、女の増加の中四割乃至六割は引揚による増加である。

(6) 増加を年齢別にみれば、昭和二三年を境として老年人口は漸増に転じ、幼少年人口は減少に転じ、一かもしの度を強め殊に第三推計では絶対減少となる。しかるに生産年齢人口は昭和二三年までは四三万五を激増して全期間の増加の七割をしめ、以後も毎年六、七〇万の増加をみせ、全期間に六二〇万乃至六四〇万に達する。この生産年齢人口はほとんど全人口を蔽うてゐるので、前項總人口増加の特色は、このままの年齢階級の特徴でもある。

(7) 又、生産年齢人口増加の七割は男の増加で、その半分は男の半分に過ぎない。この中には男女とも一五—三九歳の増加が多く、特に男は二〇—二九歳は全期間に約二六〇万、増加割合は六割強をいふ多量増となつてゐる。いうまでもなく復員復出引揚による増加がこの年齢階級に集中する為で、復出は約半は昭和二三年一〇月までの増加となつてゐる。

(8) 右と全く対し、幼少年人口の中でその一四歳は男女とも絶対減少であつて、その程度は第三推計において極めて著しい。いうまでもなく、推計の仮定たる出生率低下と、その相違によるものである。

(9) 増加率をみても、老年人口はほぼ過去の例に近き率であるが、幼少年人口は生産年齢人口との対稱は著しく、生産年齢人口は男が全期間に三割三分を、女が一割を増加するに對し、幼少年人口は第一推計では僅かに一〇余り、第二推計では二、五〇の減少となつてゐる。

(10) 生産年齢人口の中でも二〇—二九歳が高率で、特に男においては全期間に五割乃至七割を増し、従来全く

の比をみるに激増である。これに反し幼少年人口の中の一四歳の減少率は男女とも著しく、特に第一推計は第二推計の六一七倍で、すべて全期間に一割以上の減少を示している。その他に八〇歳以上の減少も率としては著しい。このように昭和二五年における總人口は約八千万となるが、この場合推計の地域における人口密度は一方料付最大二一七、最小二一四となる。この限られた国土に、このようにほかに大有人口を集積させる。しかも四年五ヵ月間の増加人口の大部分は生産年齢人口である。これを如何なる産業によつて如何に收容し、扶養すべきか。さうに地域的に如何に配置すべきか。過去の人口動態の集積としてのこの推計人口の動きは、近い将来における人口問題として経済安定、国土計画等々、新日本建設のあらゆる問題の基礎となるべき極めて重要な課題と与えているのである。

上 田 技 官

とりわり書

本稿の中、増加実数の記述において、「般増加」と記したが、この推計の仮定では復員及び引揚による増加の他、流出流入は起らないとされているから、この場合自然増加と一致するから、その意味で讀んで頂きたい。尚一言すれば、自然増加は各年次間三〇一八〇万に過ぎず、全期間については第一推計二七五万は過去の國勢調査間の五年間の六一七割、第二推計の一四九万は過去のそれの三一四割にしか当らな。